

## 海外レポート

### イタリア保育

おもいきって 参観記 (5)

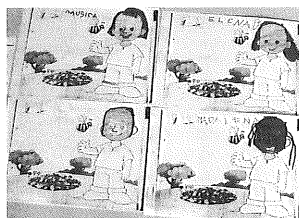
外国人の親を持つ子どもをめぐる

金澤妙子  
(大学教員)

勤務先の海外長期研修制度で、

私はイタリア・エミリア・ロマーニャ州リミニ市に、二〇一二年四月から一年間滞在した。その七年前に五か月間の短期海外研修を同州ボローニャ市で行った際、当地訪問を勧められたことがきっかけであった。

最終回の今号では、両親またはそのどちらかが外国から来ているという家庭で育つ子どもの姿と、そうした子どもを抱える保育の様子を紹介する。



▲塗り絵なのにみんな違って……



### 移民の問題と保育／プロジェクトの背景

当地には日本の公立園のような異動はないが、実際は、年度が替わると人も少し代わる。実習生が入る関係で、私もリミニ市滞在后半、新年度を機に観察する園を替わった。後半通った保育園は、一歳児クラスと二歳児クラスのみ。他の園の保育時間は十六時までで、昼食以降も残るかを親が選択するが、この園では子どもは皆、帰宅する。十二時半には続々と迎えの保護者がやって来る。ニード<sup>注</sup>パートタイムと呼ばれるタイプの園で、遅くとも十三時半には子どもは誰もいなくなる。保育者の勤務も、遅くま

で残ると決められた日以外は十四時まで。「食事があるので半分とまではいかないが、保育料がその分安い点はママたちもいいのよ」と保育者は言う。私が前半通った保育園から移ってきた保育者が、前の園と違い、ここは家にいる母親が多いと教えてくれた。

人口十四万ほどの市の中心地からバスで約二十分離れると、市内の最も北の外れ。家賃も安くなるからだろう、この園は外国人労働者が多く住む地域にあった。褐色の肌の保護者はアフリカやアラブ系、白人ではロシアやウクライナ、アルバニアなどで、イタリア語をあまり上手に話さない保護者もいた。この園の今年度のプロジェクトは、「異文化理解・交流」に決まった。一、二歳児だけなので難しいと思い、問うと、「これは私たち大人側の課題だ」と言う。九月半ばに開園し、インセリメント（適応見合わせ期間）で両親と子どもの面談が始まってみると、両親がそのどちらかが外国人という家庭の子どもが、思っていた以上に多かった。保育者側も動揺したが、イタリア人家庭の親からも、「大丈夫か、本当にこれ

でやっていけるのか」と不安の声が上がったようだ。外国人家庭の子どもを、市内の各園にもう少し均等に配分して、集中を避けるような配慮を役所はしないのかと聞く私に、「コーディネートチエ（本連載（1）参照）は言う。「親は住まいに近い所に子どもを入れたがる。役所としては、そこに家があり、園にボストがあれば受け入れる。外国から来た人の子どもが多くなるから、少し遠いけれど向こうの園に行ってくれとは言わないし、言えない」。うかつな質問だったと反省するほど、もつともなことだった。

「以前、アルバニアから来た子どもがいた。アルバニアは独裁者による支配が続いた国。父親は、アルバニア式に育てたいので家では厳しく対応しているから、園でも抱きしめたりしないしてほしいという希望であった。そうは言っても、子どもは十八か月かそこら。本人にはイタリアだのアルバニアだの関係ない。思わず抱きしめたい時にもそれができなくて、ジレンマを感じたこともある」と、ある保育者。

具体的な保育の手だてとしては、このプロジェクト

トのもと、子どもに読み聞かせる絵本を、異質なものの交流という視点で選んでいた。「イタリア人は開放的なイメージがあるかもしれないが、イタリア以外の国の人に対して、案外保守的で閉じてしまう。あとは、各自の国の料理を持ち寄るようなことから始めて、理解を深めていければ」と話す。本連載(2)でイタリアの幼稚園・保育園には、クリスマスと年度末(六月)に大きな集いがあると書いた。この園では独自に、保育者と父母の会で貧困者への支援に取り組んでいて、年間五回開催するフェスタではさまざまな手作りの物を売り、売上金を寄付する。お国料理の持ち寄りは、この園らしいアイデアである。

### 塗り絵なのにみんな違っ

月平均二回、この園のみは丸一年かけて観察に通ったベネト州パドヴァ市の公立幼稚園(前号で紹介)は、黒人が多い印象を受けた。知人(通訳)が、両親がイタリア人という子どもの割合を聞いたところ、保育者はあまり言いたくなさそうに、60%くらいと

答えたそうだ。しかし知人は、白人でパツと見ただけではわかりにくい外国人を含めると、半々くらいではないかと言う。希望の園に入園可能でも、あまり外国人が多いと親のほうが敬遠して、第二、第三希望のほうに回ることもあるそうだ。園児を持つ母親ならではの貴重かつ興味深い話だったが、保育者は、もちろん分け隔てなく接していた。前回研修時、ボローニャ市でも、園内の外国人の子どもの説明の際、「日本では考えられないかもしれないけれど、私たちは役所が受け入れれば、どの国の子どもも受け入れるわ」という保育者の言葉に、誇りとこの国における移民差別の問題を感じたことを思い出した。

観察初日、五歳児は午前中、初めて小学校へ出かけ、午後の保育では、そこで見たこと感じたことを話し合って絵に描いていた。パドヴァ市の公立幼稚園では、週二回英語の教師が来園する。この日はその日で、三、四歳児が午睡をしている間、こうして五歳児だけの活動をしながら、六、七人ずつのグループで英語の授業を受ける。五種類の色の名前と使

い方（形容詞＋名詞／イタリア語と逆）を学んだ後、坊主頭の子どもが描いてある紙が配られ、学んだ色で塗る。黒人の女兒は肌を茶色で塗り、頭に（自分の）三つ編みを描き足した。白人の子どもは肌をピンク、髪を黄色や茶色で塗っていた（冒頭写真）。私が「肌って肌色じゃないのね」とつぶやくと、知人は、わが子（イタリア人とのハーフ）が、「『ママ、顔はピンクよ』と言うのがよくわかった」と言う。

帰りの会でも小学校でのが話題になった。ある黒人の女兒が「私みたいに肌の茶色の子がいたわ」と言うと、「私も初めて小学校に行く時、不安だったけれど、行ってみたら楽しかったわ」と保育者。子どもにすれば、思い出したことをパツと口にしたただけかもしれない。だが私には、普段は肌や髪の色などに関係なく入り交じって無邪気に過ごしていても、就学の近づいたこの時期、小学校という新しい世界の入り口で、自分と同じ外見の子どもに着目し、心に刻んで帰ったようにも思え、この



▲塗り絵の下絵

子なりの安堵の思いを垣間見た気がした。

### 率直な反応、工夫の価値

リミニ市で滞在前半に通った保育園の女兒ソフィ（15・20か月クラス）は、保育者がしてほしくないことを意欲的にする子どもだった。たたく、つねる、かむ、が言葉でもある年齢だが、いろんな子どもの泣き声のとは彼女ということがよくあった。室内用の大きな動物シーソーを一人で窓際に押して行き、それを台にして身を乗り出して外を見ようとする。玄関脇にある遊具庫の扉のノブを、精いっぱいのもま先立ちで何とか開けて、外で使用する三輪車をホールに持ち出して乗ろうとする。この園全体のプロジェクトは「自主性」だった。彼女のこういう行為をその芽生えと考える私とは異なり、保育者は、それは自主性ではないと言う。「ソフィの両親はマケドニア人で、イタリア語がほとんどわからない。親戚も含めた一族で移住し、年の離れたいとこたちも近くに住んでいて、ソフィはよく遊んでもらって

る。中学生のいとこたちには玩具のように扱われることもあり、園でそれをまねるが、他児に危険なこともある。私たちがダメよと言っていることもわかっていない可能性もある。でも、言葉はわからなくても、禁止や容認されていないことはわかるのではないか。ずる賢いところもあると思う。イタリア語の理解の問題もあるので、何度も繰り返し伝えていくしかない」と話す。親子だけの移住は、一族の場合と違い、周囲に頼る人がいないことも多く、保育者は親の不安にも気を配っていた。

リミニ市で滞在後半に通った幼稚園にも、両親またはそのどちらかが外国から来ているという子どもは何名もいたが、全園児百名の中で黒人は四歳児クルスの女兒一人だけだった。その子の少し突き出た感じの下唇を、戯れなかめくるようにして裏側をじっと見て、ぱっと行ってしまったイタリア人の子どもの行為は、異質なもののへの率直な興味の表れにも見えた。下唇の内側は、茶褐色の肌の色とは全く異なる、鮮やかな美しいピンク色をしていた。

「世界」は、幼児ととてもかけ離れているように思うが、外国人の親を持つ子どもの存在は、最も身近な「世界」（への入り口）。子どもはとてもストレートに、大人は努力と工夫で向き合っていた。

日本人のほとんどいないこの町にも、ほかの町と同様、中国人は多かった。イタリア人からすれば、中国人はなじみ深い。それでも私は、滞在中、中国人と間違われることに抵抗があった。十把一からげにアジア人に見えるとわかっていても、また、私にもスペイン人とイタリア人は同じに見えても……。そこに日本では意識しないバイアスがあることを感じた。それは、私が日本人としてのアイデンティティーを持つからにはかならない。保育者も外国から来た親も、当然各自の国のアイデンティティーを持つ。それはそれで大事なことである。それゆえ、異なるアイデンティティーに近づこう、寛容であろうとする過程で払われる努力は、単純にオープンであること以上に価値のあることだと思う。――終わり――

注 nido…保育園の意味。〇―二歳児が対象。